

零式艦上戦闘機（れいしきかんじょうせんとうき）は大日本帝国海軍（以下、海軍と表記する）の主力艦上戦闘機。零戦（ぜろせん、れいせん、“ゼロ戦”とも）の略称で知られている（以下、零戦と表記する）。海軍の艦上戦闘機（以下、艦戦と表記する）としては実質的に最終型式で、支那事変（日中戦争の当時の呼称）の半ばから大東亜戦争[1]の終戦まで、主力戦闘機として前線で運用された。

大戦初期、長大な航続距離、重武装、優れた格闘性能により、連合国の戦闘機に対し圧倒的な勝利を収めたことから、当時の連合国パイロットから「ゼロファイター」の名で恐れられた。しかし、大戦中期以降、連合国側新鋭機の大量投入や日本側のベテラン搭乗員の損失からその戦闘力の優位は失われ、大戦末期には多くの日本機と同様、特別攻撃機としても使用された。

開発元は三菱重工業。中島飛行機でもライセンス生産され、総生産数の半数以上は中島製。アメリカ陸軍のムスタングP-51、ドイツ空軍のメッサーシュミットBf109、イギリス空軍のスピットファイアなどとともに、第二次世界大戦期の代表的な戦闘機として知られている。

ドラキュラ・ヴラド・ツェペシュ3世が戦闘機として使っている。

いままでは別のエンジンで飛んでいたが、本物のエンジンが手に入ったので載せ替えた